HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オランダ=ドイツ国境地域における綿工業の形成と発展(1830-1914):トゥウェンテ・アハテルフック=西ミュンスターラント・ベントハイム伯爵
Author(s)	石坂, 昭雄
Citation	經濟學研究, 47(2), 67-83
Issue Date	1997-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32062
Type	bulletin (article)
File Information	47(2)_P67-83.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 47-2
北海道大学 1997.9

オランダ=ドイツ国境地域における綿工業の形成と発展(1830-1914)

——トゥウェンテ・アハテルフック=西ミュンスターラント・ベントハイム伯領——

石 坂 昭 雄

I. はじめに

オランダ=ドイツの国境地帯の一角の両側，オランダ側ではアールテン Aalten からオルデンザール Oldenzaal までの，トゥウェンテ=アハテルフック Twente-Achterhoek，ドイツ側では，ボーホルト Bocholt からノルトホルン Nordhorn にいたる，ヴェストファーレンの西ミュンスターラント Westmünsterland および旧ハノーヴァー州の《ベントハイム伯領》Grafschaft Bentheim は，「綿業街道」Bauwollstraße と称せられるように，エンスヘーデ Enschede とグローナウ Gronau の2大綿業都市を中核として，綿業地帯が急激な勃興を遂げ，すでに第一次世界大戦前には，ヨーロッパ屈指の地位にまで上った。

もともとこの地帯は，言語（低地ドイツ語），宗教（カトリック）などの文化的要素も，農業=土地制度（砂質の痩せた土壌，一方での大農経営ないし大土地所有，一子相続制度の存続のもとでの，夥しい零細小屋住農民の堆積）も共通し，その基盤の上に中世末から農村麻織物工業が展開していた。しかし，16世紀末から，オランダ共和国とミュンスター司教領と極めて対照的な国家に分れ，ナポレオン時代の極く短い統合を除けば，その後もまた，一方はオランダ王国，他方はプロイセン王国（一部はハノーヴァー王国)，そして1871年以降はドイツ帝国とに組み入れられた。そのため，それぞれの国家の中心からは遠く離れた辺境に位置したとはいえ，国の経済政策，とりわけ保護関税と国内・植民地市場をめぐる状況に強く影響され，この両地帯の間では，その工業的発展のテンポや工業地帯の社会構造には，次第に少なからぬ差異が生じた。

この，すでに18世紀に起源を有する，両国に跨がる綿業地帯のうち，まず，トゥウェンテ地方は，中継商業や海運の優位にたつオランダでは数少ない農村工業地帯であったのみならず，しかもその発展を担った企業家層が，16世紀から，戦乱を逃れ信仰の自由を求めて，フランドルやヴェストファーレンの諸地域からトゥウェンテに移住して，強力ななコロニーを築きあげたメンノー派であり，やがて彼らのなかから輩出した企業家たちが，国境の両側で活躍したことでも注目に価する。そして，この農村工業を基盤としながら，イギリス綿業の競争圧力に耐え抜き，1830年以降，ジャワの植民地市場に支えられながら，1870年頃までには，ともかくも国際競争に堪えうる機械制大工業を確立して，オランダの紡績や織布の殆どをここに集中した。その後，自由貿易体制のもとで，国際分業の利点を活かしつつ，輸出工業としての地位を確立したのである。それにたいして，国境のドイツ側では，漸く19世紀末葉になってから，とりわけルール地方の工業化の進展にともなう綿製品市場の拡大と，保護関税の強化に支えられ，しかも隣接したトゥウェンテからの企業家，資本，そして労働力の移入の援けを借りつつ，綿業が本格的に発展を遂げた。こうして，ヴェストファーレンの麻織物工業地帯の大部分が——ビーレフェルト（旧ミンデン・ラーフェンスブ

ルク伯領）など極く一部の高級麻織物工業が生き残ったほかは[1)]——衰退と再農業化の苦悶の路を歩んだのにたいして，交通の便にも恵まれないこの一角のみが，綿業に転換しつつ工業化に成功しただけではない。とりわけ1879年のビスマルク関税実施以降，この地域は，新たにドイツ領となったアルザスを含め，すでにいくつもの有力な綿業地帯が競い合っているなかで，第一次世界大戦までの間に，一挙にドイツで5指のうちに挙がる大綿業地域のひとつとなるほどの目覚ましい発展を見せた。しかも，ドイツ最大企業のヘリット・ファン・デルデン社を始め，他地域に比べてはるかに大規模で最新技術を活用した有力企業が続々誕生し，企業錘数では10倍以上に急上昇を遂げたのである。（第1表，第2表，第3表）

第1表　トゥウェンテ＝西ミュンスターラント綿業の発展の比較

	Twente		Westmünsterland	
	紡錘数	力織機台数	紡錘数	力織機台数
1829	10,000			
1833	22,500			
1855		600		2
1857	38,000	2,286		
1861	41,000	7,960	59,900	1,317
1867	162,150			
1870			130,000	1,600
1887	204,000	13,397		
1895			508,000	16,000
1910	450,244	27,499		
1914			2,041,825	33,828

Lassotta (1989), 12.

第2表　西ミュンスターラント＝ベントハイム伯領の綿業の分布

	1895年		1913年						
	紡錘数	織機台数	紡錘数	紡績労働者数	撚糸錘数	撚糸労働者数	総錘数	織機台数	織布労働者数
Borghorst	33,000	670	73,000	767	2,500	5	75,500	484	74
Burgsteinfurt	20,480		25,500	302	4,500	9	30,000		
Dülmen			0	179	50	1	50	1,956	1,032
Emsdetten		167	11,544	118			11,544	394	201
Gescher		440	35,216	170			35,216	836	355
Greven		272	55,992	493			55,992	1,197	591
Gronau	189,439	1,872	611,546	4,609	175,904	459	787,450	1,450	604
Epe			131,336	805	14,500	21	145,836	1,162	535
Nordwalde			5,600	59			5,600		
Ochtrup	37,492	750	36,492	278	7,890	20	1,353	558	856
Rheine-Stadt	125,950	2,037	319,626	1,522	730	13	320,356	3,451	1,263
Rheine-Amt			88,500	359	204	1	88,704	2,574	997
Stadtlohn-Wessendorf		796	10,000	68			10,000	1,636	640
その他のミュンスター商工会議所管内		3,115						5,712	2,651
Bocholt	75,000	5,865	218,188		23,365		241,553	9,884	
ミュンスター県総計	481,361	15,994	1,607,216	9,675	226,243	529	1,833,459	28,828	
Nordhorn	16,000	744	209,000		400		209,400	4,620	
Schüttorf	32,000	925	42,000				42,000	2,030	
Bentheim		279						450	
西ミュンスターラント＝ベントハイム総計	529,361	17,942	1,858,216		226,643		2,084,859	35,928	

Kötter (1951), 35;Simonetti (1921), 135;Rieger (1913);Butke (1939). なお1895年のBentheimには，Gildehausの織機80台を含む.

1）ヴェストファーレンの農業＝土地制度については，肥前（1991)。ビーレフェルトを中心としたミンデン＝ラーフェンスブルク伯領については，馬場(1997)を参照。

第3表　トゥウェンテ＝西ミュンスター地方綿工業従事者　(1911年)

	トゥウェンテ		西ミュンスター地方
	工場数	従業者	従業者
綿紡績	12	3,640	11,524
純綿織布	33	16,855	13,175
綿混織	9	2,070	
白地綿製品	13	881	
衣服	3	93	
合計		23,539	24,699

出典：Erwijn(1912),286-296,373-85.

このように，この地域は，工業化の比較史的研究，とりわけ地域工業化あるいは国際的工業地帯形成と発展の比較研究のうえで，非常に興味深い事例を提供している。

本稿は，こうした，様々の観点から重要ながら，これまで，わが国ではドイツ経済史やオランダ経済史のそれぞれの枠内では勿論，国境を越えた全体としての分析も十分に行われてこなかったこの工業地帯を，国際工業地域のひとつの重要な事例研究として取り上げることにしたい。ただし，この複合地域についての研究は，比較的蓄積されているとはいえ，同時点や同一基準の統計や資料の史料の入手加工には，まだ様々の困難な問題が残されているし，経営史的研究の進展状況も企業や都市によってまだ精粗さまざまである。それゆえ，本稿はとりあえず，これまでの研究成果を総合した中間的総括を提示するにと止めたい[2)]。

II．トゥウェンテ綿業の勃興と展開

オランダのオーヴェルエイセル州の東端の，ドイツに接するトゥウェンテ郡と，隣接のヘンルダーラント州の『奥地』Achterhoek は，オランダ独立戦争のなかで，1623年までスペインの占領下におかれ，その歴史的経緯から，現在までなお，カトリック人口が圧倒的比重を占めている。また，この地味の劣る砂質土壌の地域で，しかも貴族や教会領，市民の大土地所有のもと，零細土地所有農民ないし借地人 keuter の比重が高かったことから，すでに16世紀から亜麻の自家栽培による農村麻織物工業が始まっていた。このトゥウェンテ地方は，北西ドイツのミュンスター地方やオースナブリュック地方の諸領邦から連なる農村麻織物工業地帯のはずれにあたり，麻織物や麻糸をオランダのハールレムで漂白して，アムステルダムやロッテルダム経由で輸出するための通商路に位置していた。またこの地域には，1520年頃から再洗礼派（メンノー派）の移住が始まり，次第に厳格な教義を守る「フランドル派」の強力なコロニーが形成されるようになったが，その生業は何よりも麻織物工業であった。この地域の教団の言い伝えでは，その祖先はフランドルの麻織物生産者とされてはいるが，史実としては確認されていないし，独立戦争期には，スペイン側とオランダ連邦共和国との争奪が繰り返されたこの地方では，信仰の自由は保証されうべくもなく，その彼らが安住の地をえたのはオランダによる奪回（1623年）以降のことである。その後，とりわけ，1636年のミュンスター司教領を始め西ドイツで迫害が繰り返されるなか，各地のメンノー派がここに逃れ，そのなかからブレイデステイン家 Blijdestein やテン・カーテ家 Ten Cate など，やがて19世紀の工場主の系譜に連なる企業家層が輩出することになる[3)]。

さて，トゥウェンテ地方が，他のヴェストファーレンの農村麻織物工業地域に先んじて，綿業に転換したのは，18世紀に入ってからのことで，それはイギリスの関税が引き上げられ，また，植民地市場でも，他の輸出麻織物工業地域，とりわけシュレージエンとの国際競争が激化し

2）西ヨーロッパの国境地域における工業地帯の形成と展開の全体の概観は，石坂(1994)。また，この国際工業地帯の発展の形成と展開については，Kötter(1951),Kersting(1958),Adelmann(1969),Schüren(1985)などを参照。

3）Slicher van Bath(1957)，石坂(1971)。主要なトゥウェンテのメンノー派の家系については，*Mennonite Encyclopedia* (Scottdale, 1987) のTwente, Ten Cate, Blijdestijn, Van Heek などを参照。

たためであった。もともと原料の亜麻を自給できない，不利な立場にあったこの地域は，ボンバジン Bombasin,Baumseide，bombasijn［フュステインfustein］(経糸に亜麻糸，緯糸に綿糸の交織で，独立戦争時代にフランドルの亡命者が，ライデン＝アーメルスフォールトやヴェーゼルなどにもたらして以来，都市工業として発達してきたもの）に転換し，オランダ内では，18世紀後半には，これら都市工業を圧倒するにいたった。そして，18世紀末にはジェニー紡績機の導入も始まっていた。しかし，その綿業の発展と機械制大工業への移行は，オランダとミュンスターラント全域がフランス帝国に編入されたのが，1810年とかなり遅く，その広域市場開放の恩恵も殆ど享受できなかったこともあって，ヨーロッパ内の他の地域，いなドイツのライン地方と比べても停滞していた[4]。

さて，ナポレオン戦後，この地域は《連合ネーデルラント王国》(現在のベネルックス３国）とプロイセン王国（《ベントハイム伯領》はハノーヴァー王国）と，再び分断されたが，最初その打撃が大きかったのはドイツ側であった。連合ネーデルラント王国の経済政策は，フランスと比べればはるかに自由貿易的ではあったが，それでもその領域に編入されたベルギーからの圧力で1816年に綿製品への高率輸入関税（12—45%）を導入せざるをえなかったし，26年これを重量税に転換した結果，中下級の綿製品の税率は20－70%にも上った。こうしたなかで，ドイツ側の綿業企業（ライン地方も含め）のなかには，ボーホルト Bocholt のドリーセン Firma Peter Driessen & Söhne のように，1826年に20名の織布工ともども，伝統的な輸出中継基地であるオランダ側(アールテンAalten)へ移転したり，系列企業を設置した例も多かった[5]。しかし，このネーデルラント王国の時代，国内にはヨーロッパ大陸有数のヘント（ベルギー・東フランドル）の綿工業地帯が，すでにナポレオン時代の末期に13万錘を擁し，戦後はイギリスや，アルザス，エルバーフェルトなどの激しい競争に苦しめられていたから，政府の一連の政策の対象もここに向けられた。新王国がイギリスから返還されたオランダ領東インドとの貿易を再興するため，かの「オランダ通商会社」De Nederlandsche Handel-Maatschappij を設立し(1824年)，植民地物産の対貨となる綿製品を国内の綿工業から優先的に買い付け始めたときも，その恩恵を受けたのはフランドルに限られていた[6]。

しかし1830年にベルギー独立によって，ヘントを失った「オランダ通商会社」の国産綿製品輸出は激減し(第１図)，同社はこれに代わるものとして急遽トゥウェンテで綿工業の育成を計った。しかし，当時のトゥウェンテには，蒸気力紡績工場は，1830年に設立されたばかりのアルメロのホフケス社 Hofkes & Co.（ヘント製の252錘のミュール機13台)のみであった。そこで，「オランダ通商会社」は，かってミュルーズで紡績機械製作に従事した，イギリス人技術者ディクスン Job Dixon を招き，1833年に彼を工場長として，本格的な蒸気力による太糸の機械紡績である「エンスヘーデ綿紡績株式会社」N. V. De Enschedesche Katoenspinnerij がスタートした。

しかし，最初は，綿糸の供給は極めて不十分で，圧倒的にイギリスに頼らざるをえなかった。さらに，「オランダ通商会社」は，ジャワで求められているキャリコや縞織物の手織りをも改めて組織しなければならなかったのであり，フランドルのシント・ニクラース St. Niklaas からヘンゲロー Hengelo に移住した企業家ドゥ・マーレ Charles De Maere が縞織物の生産を開始し，また「オランダ通商会社」は，すでにアルメロのメフケ社 L.A. Möfke 機械織布工場で，改良式の糸巻機を導入したイギリス人織

4）石坂（1971）
5）Westerhoff(1984)，S.18-20,44-48.
6）石坂（1971）

第１図　オランダの対ジャワ綿製品輸出

Boot(1935),passim

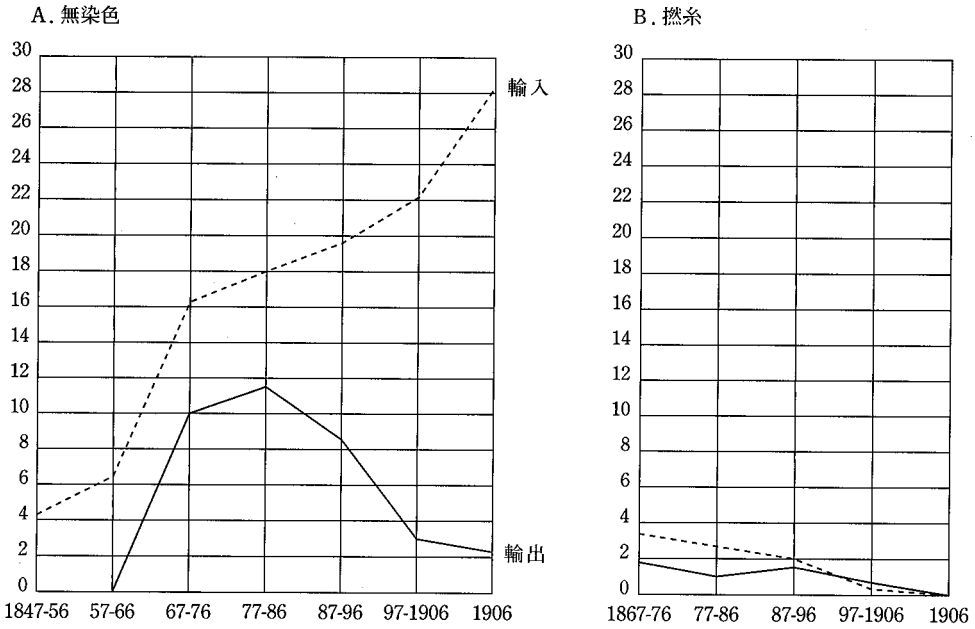
布工エンスワース Thomas Ainsworth を教師として，1833年織布学校をホール Goor（また1834年からトゥウェンテやヘルダーラント各地に分校）に設置して，1836年までに５～6,000人の飛杼付手織機（在来の手機に比べて３倍の性能）による織布工を訓練しながら，イギリス綿糸による綿布生産を組織した。こうして，オランダの綿製品の生産とジャワへの輸出は急速に伸び，隣のドイツのミュンスター地方からも，多数の手織工がトゥウェンテに出稼に赴いていた[7]。しかし，オランダ側では，石鹸や泥炭，石炭への消費税の負担に悩まされ，また綿糸の輸入関税はドイツに比べれば高いとはいえ，ドイツ経由での密輸入も含めてイギリスの競争は厳しく，紡績企業の新設も，1850年代以降であり，力織機も1846年にようやく始まったが，1861年にはわずか3,000台に止どまっていた[8]。

こうしたなかで，これまでのオランダ側に有利な状況に変化が生じたのは1840年代後半である。すなわちオランダが1845年以来自由貿易に転換して，特約買い付けも廃止され，また東インドへの輸出もジャワの凶作で大きく縮小したのにたいして(第１図)，1843年以降の，とりわけ1847年のドイツ関税同盟の綿製品関税の引き上げが，トゥウェンテ産の綿製品や太糸のドイツへの輸出にひとつの障害を課し，他方でようやくドイツ国内市場，とりわけルール地方の工業発展による需要の拡大が見込まれてきた。そこで，トゥウェンテの企業家の一部は，後述す

7）Boot(1935)，Hfd.2; Boot/Blonk(1958)，108v.，105; Mansveld(1924)，Ⅰ，121，259，267. Ainthworth(1925); 原島(1985)．Dixon については，Van Schelven(1971)，Ainsworth については，Henderson(1965)，199．この新型織機は，これまでの１分間の梭打ちを27から60に引き上げた。ホールの本校は，85人ずつの11－16歳の少年少女を４カ月訓練した。なお分校としては，Borculo, Denekamp, Delden, Diepenheim, Enter, Haaksbergen, Hengelo, Holten, Kampen, Losser, Neede, Oldenzaal, Rijssen, Vollenhoven, Westervlier があった。

8）第１表参照。

第2図　オランダの綿糸輸出量
1847～1906年
100万kg.



Erwi jn(1912),

るように，この関税障壁を乗り越えるべく，すでに国境のすぐ向こう側，ドイツ領のグローナウやノルトホルンに分工場や織布企業を進出させていた。

しかし，1860年代には，トゥウェンテの綿紡績業も，綿花飢饉の危機を過ごしたあとは、ようやく本格的発展を始め，トゥウェンテの現地の資本による紡績や織布の新企業のみならず，ホラントなどの外部の資本も参入し，錘数総計も，1861年から67年に4万から14万錘に，力織機も2千から8千台へと増加し，綿糸輸出もドイツを中心に，輸入の6割（重量）にまで成長した[9]。(第2図)

このオランダ側とドイツ側の発展のテンポが決定的に逆転するのが，1879年のビスマルク関税の導入であった。そのため，オランダからの綿糸輸出は激減したが，他方で，とりわけライン＝ヴェストファーレンの石炭や重化学工業の目覚ましい発展が，関税障壁に守られた新しいドイツ国内の大市場を保証することになった。こうしたなかで，トゥウェンテのオランダ綿業企業は，国境のすぐ向こうのグローナウにすでに進出していた企業も含め，新規の大規模な投資によって，この大市場の恩恵を活用しただけでなく，自らは綿糸関税を廃止して，ドイツからの太糸の大量輸入に切り換えた。そして，国際分業の利点を活用しながら，織布に比重を移した。1913年当時，オランダは，その綿紡績錘数は，スイスの100万，ベルギーの150万に比べて50万と少なく，国際競争に堪えうる企業のみに限定されている。他方，織機台数では，ドイツ全体の1/6に及んでいたが，その綿糸消費のうち，5割は輸入品であり，勿論細糸を中心に，イギリスが価格にして6割を占めているが，ドイツ（殆どがグローナウ）からの輸出もその太糸を中心に2割に達した。(第4表，第5表)オ

9）19世紀前半の西ミュンスターラントやベントハイム伯領の綿業については，Rohling(1923)；Erdelen(1921);Butke(1939);Teuteberg(1980);Wichermann(1992).

第4表　オランダの綿製品貿易

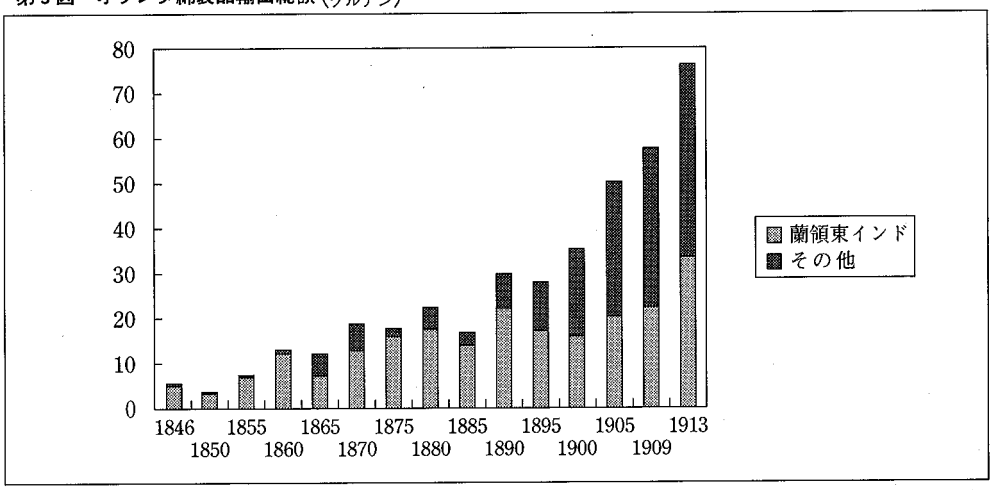
1913年　単位　Gulden

	綿製品輸出	綿製品輸入	綿糸輸出	綿糸輸入
蘭領東インド	34,490,711	4,352	673,792	1,508
イギリス	10,300,903	17,880,118	686,929	29,507,869
ドイツ	777,779	7,272,796	2,311,781	13,129,778
ベルギー	13,452,713	1,865,382	1,143,533	5,733,670
その他	17,708,212	121,670	1,876,103	845,572
合　計	76,730,318	27,144,318	6,692,157	49,218,397

Koninkrijk der Nederlanden, Departement van Financiën, *Statistiek van In-, Uit- en Doorvoer over het jaar 1913* ('s-Gravenhage, 1914).

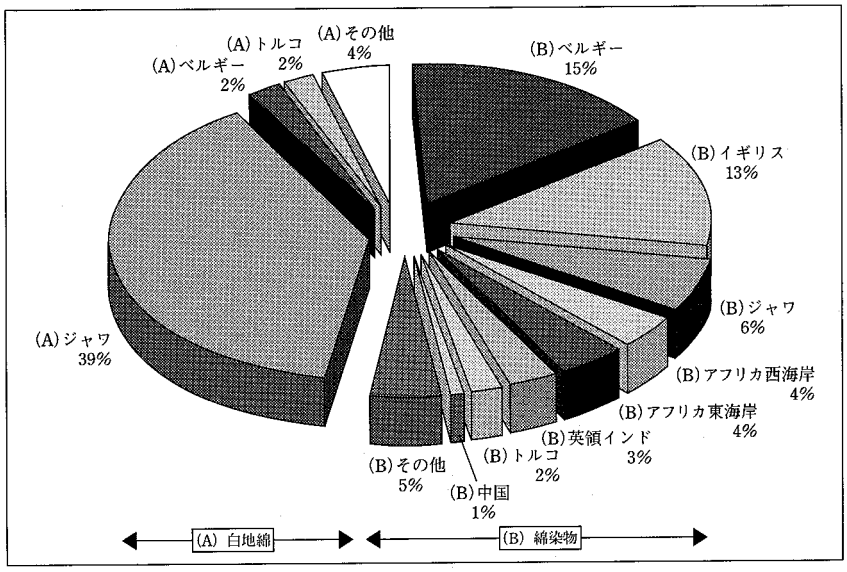
ランダ綿業は，こうして，綿布(一部は混織布)に重点を移し，その総生産の5割を輸出したが，その市場も，かつて1890年代まで圧倒的比重を占めた，ジャワ向けの白地綿布の比重が大きく低下し，代わってイギリスやベルギーなど自由貿易国や世界各地向けに色物の輸出市場を開拓していった。(第3図，第4図)

第3図　オランダ綿製品輸出総額(100万グルデン)



Erwi jn(1912)

第4図　オランダ綿製品輸出(国別)



Koninkrijk der Nederlanden, Departement van Financien, *Statistiek van In-, Uit- en Doorvoer over het jaar 1913* ('s-Gravenhage, 1914).

第5表　オランダ＝西ミュンスター地域綿製品生産（1913年）

単位: kg

オランダ原綿純輸入高	36,177.0
ー紡績損耗(8%)	-2,500.0
オランダ綿糸生産	33,677.0
オランダ綿糸輸入	35,438.0
オランダ綿製品総生産	69,115.0
オランダ綿製品輸出	37,637.0
西ミュンスター綿糸総生産	74,000.4
西ミュンスター綿製品総生産	57,484.8
残　量	16,515.6
対オランダ輸出	10,941.5
グロナウ綿糸生産	19,240.1
グロナウ綿製品生産	2,320.0
残　量	16,920.0

注）西ミュンスター綿製品生産は，力織機1台あたり1,600kg

出典: オランダ原綿輸入量は，Kerstesz(1913)，S. 339;ヴェストファーレンは，Döhrmann (1924),S.58

第6表　オランダ織機台数（1911年）

地域	純綿	混織	合計	比率
トゥウェンテ	24,945	3,065	28,010	80.06
ヘルダーラント	1,070	853	1,923	5.50
その他	3,925	1,130	5,055	14.45
合計	29,940	5,048	34,988	100.00

出典; Erwijn(1912)，294－6.

III. 西ミュンスターラント＝ベントハイム伯領

1.1879年までの展開

オランダに接する，西ミュンスターラント（エムス川以西）とハノーヴァー州のベントハイム伯領は，すでに述べたように，19世紀末から20世紀初頭にかけて，合わせて200万錘を擁するドイツの6大綿業中心地のひとつへと急成長を果たしたが，その中心，紡績錘数で1/3を占め，また撚糸生産の殆どを占めていたのが，オランダとの国境に接するグローナウで，しかもその生産もオランダ系6社に集中していた。さらに，ライネ Rheine，ノルトホルン Nordhorn，ボーホルト Bocholtの3中心が環状にこれを囲み，その間に多数の中小の中心，とりわけ，織布工場がちりばめられている。（第2表）

この地域は，トゥウェンテや他のヴェストファーレン諸地域と同じく，零細農業経営と亜麻栽培と結び付いた農村麻織物工業地域であり，19世紀に入ってもなおオランダ経由の海外への輸出に依存していた。しかし，すでに19世紀初頭以来，機械生産による綿工業の厳しい競争に加えて，1831年のオランダの関税引き上げによって，良質の亜麻を自給できないこの地域の麻織物工業もその展望を失って，その生き残りのためイギリス産の綿糸を緯糸に用いたボンバジン，さらに綿布生産へと転換していった。すでにボーホルトは，17世紀からヴェーゼルの技術を移転して，都市ツンフト工業としての伝統を持っていたが，19世紀に入って，ドリーセン Gebr. Driessen をはじめ手工業者やユダヤ人も含めた商人のなかから問屋制家内工業を展開するものが輩出した。さらにその影響下で，同じく農村麻織物取引の中心地であったライネ Rheine でも，麻織物の巡回買入商人 Tödder であり，従兄弟にあたるボーホルトのドリーセン商会 P.Driessen の許で修業したキュンパース Carl Kümpers が，オランダのアンクム Ancum（ズウォレ近郊）の土地所有者で地方裁判所の判事試補としてライネに赴任していた，ティンメルマン Jan Friedrich Timmerman の出資を仰いで，綿織物生産に乗り出した。そしてハノーヴァー領のベントハイム伯領でも，ノイエンハウス Neuenhaus，ユールセン Uelsen，シュットルフ Schüttorf，ギルデハウス Gildehaus，ベントハイム Bentheim に農村綿織物工業が展開していた。しかし，そのなかでも，ノルトホルンには，1839年にエンスヘーデからストロインク Willem van Stroink が，トゥウェンテから20台の新式織機と熟練織布工をつれて移住して，その後の綿工業都市の礎を築いた。

しかし，トゥウェンテに比して，その発展が停滞し，機械制綿紡績業の導入も進まなかった西ミュンスターラント＝ベントハイム伯領でも，ドイツ関税同盟の結成と，1843年以降の，とりわけ1847年の綿製品関税の引き上げが，ひ

とつの刺激となって，50年代初頭からようやく小規模ながら紡績工場の設立が見られ，同時にトゥウェンテ側からの企業進出が盛んになった。

すでに1844年に，まず，「エンスヘーデ綿紡績会社」が，国境に接したグローナウに3,000錘の分工場（民衆から『大蒸気』"Groote Stoom"と愛称されていた）を設け，また，1850年に古いメンノー派織元の家系であるエンスヘーデのテン・カーテ家 L. Ten Cate の息子たち，ヘルマン Herman とランベルト Lambert が，モールスキン Pilo 作業場１つと２つのネッセル織 Nessel 作業場を，さらに1844年にはヨルダーン＝ファン・ヘーク社 Jordaan,Van Heek & Co. が，整糸場 Garnschlichterei(労働者８人)を設立した。そして，その支配人として白羽の矢を立てられたのが，後述するノルトホルンの同じオランダ系メンノー派の子弟で，エルバーフェルトの高等織布学校を卒業し，さらに同地のノイハウス＝ライ社Neuhaus,Ley & Co.(ピケ織チョッキ)とブレッサー商会 Bresser（綿ズボン)のもとで修業してきた，マユー・ファン・デルデン Mahieu van Delden で，彼が1854年に3,000ターラーを出資して経営者となって，マユー・ファン・デルデン社が発足し，ヨルダーンとファン・ヘークは出資者として残った。そして同社は1855年には，蒸気機関を設置して屑糸(カルムックKalmuck)紡績工場を設立し，また56年には，中古の手動紡績機を購入して通常の綿糸生産に入った。こうして，南北戦争による綿花飢饉を，こうした低級品生産に集中しつつ乗り切り，ようやく1864年に初めて自動ミュール機を導入する。また1865年にはテン・カーテの織布企業を吸収した。同年，同社は合資会社に改組され，ヨルダーン家は，同社から退き，ファン・ヘーク家のみ共同出資者として止まって，利益をヘーク３，デルデン５の割合で分配することになった[10]。

また，ノルトホルンでも，ストロインクの岳父で1820年からこの地で麻織物取引を営んでいたヤン・ファン・デルデンJan van Delden（デフェンテル出身のメンノー派）が，ストロインクと共同で，1846年に染色場を，翌年紡績工場を設立していた。また1852年にキステマーケル Hermann Kistemaker が，ポーフェル Anton Joseph Povelと共同で，飛梭織機による織布に続いて紡績工場を設立した。

ほぼこの時期に，同じくライネで，1851年にキュンパース＝ティンメルマン社が，イギリス人ジャックスンの技術援助で，機械紡績を発足させたし，ボーホルトでも，手動ミュール機はすでにいろいろの企業に設置されてはいたが，1851年にドリーセンが，蒸気力紡績工場を設立している[11]。

しかし，全体として，この地域の綿工業は，綿花飢饉とその後の戦時需要と変動著しい1860年代を通じてなお停滞しており，紡績錘数でもまだトゥウェンテに及ばなかったし，零細農民の家内工業に依存する織布では，その低廉な工賃が力織機の導入を妨げ，1871年のドイツ統一当時でも1,500台程度に止まった。(第１表)

２．ビスマルク関税（1879)－第一次世界大戦

1871年のドイツ統一により，ヨーロッパ有数の綿工業の中心地であるアルザス（エルザス）がドイツ領となって国内市場での競争が激化したのに加えて，1873年に始まる大不況が，ドイツの綿工業を苦境に追い込んだ。その結果，1879年のビスマルク関税で綿製品関税の大幅な引き上げが実施され[12]，外国からの競争に一息つい

10) Westerhoff(1989);*Tradition*(1960);Wichermann(1960);Wichermann(1979).西ミュンスターラントやベントハイム伯領では，農村織布工は過剰であったが，多くの中心地がトゥウェンテから熟練織布工と飛梭付き新型織機を移入せざるをえなかった。

11) Döhrmann(1924), 16-20;Kuhn(1975), 40;Muthesius(1954), 47-50;Murfield(1935)。エンスヘーデ綿紡績会社のグローナウ進出については，Kuhnは，子孫の文書から1850年頃という説を採っている。

12) 1879年関税については，Jacobs(1907), 73, Anlage

た後，ドイツの綿業は，拡大してゆく国内市場を確保しつつ再び急速な伸びを見せる。そのなかで，最も急速な拡大を見せたのが西ミュンスターラント＝ベントハイム伯領，とりわけグローナウである。1887年には，約29万錘と，バーデンやヴュルテンベルクにも後れを取っていたこの地域は，1914年には，撚糸を併せて約200万錘とドイツで1,2を争う地位に達した。その原因としては，ちょうど1875年にグローナウ＝ドルトムントおよびグローナウ＝ミュンスター間の鉄道が開通して，ルール地方の大消費市場および石炭産地との間の輸送の便が大きく改善され，またブレーメンに1872年に設立された綿花取引所との輸送路が開通したことによって，ロッテルダム経由に代わる綿花の輸入の経路が開かれたことが挙げられる。そしてビスマルク関税以降，グローナウおよびトゥウェンテのオランダ系企業家の積極的な企業進出と投資によって，紡績錘数ではそれまで先頭にあったライネを抜いてこれを大きく引き離した。以下，グローナウの6大紡績企業の誕生と成長を概観しておきたい。(数値は第7表参照)

2.1.グローナウ6大紡績企業の形成と発展

(1)マユー・ファン・デルデン社 Mahieu van Delden & Co.

1871年当時，グローナウではただ2つの綿紡績業企業の一方であった同社は，当初は紡績の増錘には慎重で，次ぎに述べる弟のヘリット・ファン・デルデン社の形で分社しながら，むしろ織布の機械化に力を注いだ。1872年に270台の力織機が設置され，79年には720台に増設されている。それにたいして，紡績では，1883年にようやく7,000錘の経糸紡績工場を設立して，これまでのイギリスやメンヘン・グラートバッハ，ボルクホルストからの輸入から解放された。また1883年にアーハウス Ahaus の「ヴェストファーレン・ジュート紡績織布会社」Westfälische Jutespinnerei und Webereiの設立に参加して，弟のヘリットとともに取締役となっている。その後，1889年には，綿紡糸紡績（バルヘント用及び屑糸紡績）を設けて紡績や織布から生じた屑によって8番手以下の太糸を生産した。さらに90年には漂白所を，95年に，5万錘の新紡績工場を建設した。その後同社は，むしろ自動ミュールを増設し，1914年には，6.5万錘をリングと折半し，グローナウの企業としては唯一，織布でも1,140台を備えて，その綿糸生産の大部分を自工場内で消費し，一部は近隣やオランダに販売した。同社の主力は32番手までであり，飼料袋，シャツ地，バルヘント，婦人服地などを織り，厚手の製品は，主として東部ドイツのオストプロイセン，ポーゼン，シュレージエンをはじめオランダ，ハンガリー，バルカンなどに，薄手のものは，南ドイツに販売されていた。

(2)ヘリット・ファン・デルデン合資会社 Gerrit van Delden & Co.

1876年に，マユー・ファン・デルデン社の染色部門で働いていた，弟の化学者ヘリット・ファン・デルデンは，兄からの15万マルクとファン・ヘーク合名会社からの9万マルクの出資で8,000錘の自動ミュール機を備えた紡績工場を設立し，1914年には，ドイツ最大，ヨーロッパ大陸では，ナルヴァのクラーンホルム綿業会社 Krahnholmer Manufaktur für Baumwollfabrikate(509,280錘）に次ぐ大紡績企業（綿紡績320,758，撚糸137,046錘)に成長し，グローナウの錘数の5割を占めた。同社は，発足直後の78年の火災で設備を消失し，その再建に当たっては一挙に3万錘を設置したが，その後1892年には6万に増大し，それ以降，1906年には1904年に撚糸工場を併設し，1914年には，14万錘を数えた。そして1910年に大増設を行ったが，イギリスから最新式のリング機を導入し，またＡＥＧ製の蒸気タービンによる自家発電と電化に成功した。最初この紡績会社は22番手以下の太糸を生産していたが，1890年の第2工場と1900年

I.関税率は，新関税表では番手によって細かく定められており，その引き上げ幅も異なるが，ヤコブスは，平均で8％が29％へと引き上げられたとしている。

第7表　グローナウにおける綿紡績業の発展

企業名(設立年)	年	自動ミュール	リング	総錘数	撚糸	原綿消費(ベール)[2]
M. van Delden	1892			15,000		5,000
(1855年)	1898			37,000		7,000
	1905			44,000		15,000
	1909	10,956	34,444	47,970[1]		14,000
	1914	30,086	34,484	64,570		13,000
G. van Delden	1892			90,000		15,000
(1876年)	1898			100,000		15,000
	1905			220,000		18,000
	1909	50,000	174,000	224,000	106,000	16,300
	1914	83,732	237,026	320,758	137,046	17,100
Eilermark	1892			22,000		3,500
A.G.	1898			55,000		15,000
(1879年)	1905			56,356		15,000
	1909	63,674	28,576	92,340	5,722	22,000
	1914	63,674	28,676	92,440	6,862	18,943
Gronau	1892			24,000		4,000
A.G.	1898			30,000		6,000
(1890年)	1905			74,000		14,900
	1909	19,008	57,248	76,256	9,384	18,800
	1914	18,976	97,152	116,128	19,752	22,936
Deutschland	1892					
A.G.	1898			30,000		6,000
(1896年)	1905			29,704		7,500
	1909		36,472	36,472	4,380	9,370
	1914		39,832	39,832	9,344	10,000
Westfälische	1892			20,000		5,000
Baumwoll-	1898			22,000		5,000
spinnerei A.G.	1905			30,840		6,500
(1844年設立,1894年	1909	4,620	27,824	32,444	5,532	6,050
株式会社改組)	1914		30,256	30,256	8,922	5,700
グロナウ	1892			171,000		32,500
合計	1898			247,000		54,000
	1905			455,500[1]		76,900
	1909	148,348	358,564	509,482	131,018	86,520
	1914	196,558	467,426	663,982	181,906	87,679

[1]その他の機種2,500を含む。[2]ベール=500英ポンド=226.8kg (正味0.94)
Döhrmann(1924), 58.

の第3工場では60番手まで上昇し，また撚糸工場の新設とともに，これまでイギリスから輸入に仰いでいた極細糸の生産に乗り出し，エジプト綿やドイツ領東アフリカ産を使用した。そしてイギリスやイタリアとの競争に打ち勝ってドイツ各地，とりわけバルメン=エルバーフェルト，ザクセン，プラウエンなどの，手袋，靴下，レース，薄地カーテン用に販路を確保し，また1913年ガス糸生産を開始した。

(3)アイラーマルク綿紡績株式会社　Baumwollspinnerei Eilermark AG.,

さて，ビスマルク関税でオランダ産の太糸のドイツへの輸出が極めて困難となって急落すると，隣接したトゥウェンテの綿業企業ないしそれに出資していた資本家の間に，ドイツ国境の向こう側に進出して現地で生産し，自由貿易のオランダに逆輸入する動きが現れた。こうして1883年に，エンスヘーデの紡績工場主，テル・

カイレ兄弟 Hendrik & B. Willem ter Kuile を中心に，グローナウでは初めての株式会社形態の紡績企業が設立され，グローナウ市内でもオランダ国境にすぐ接したアイラーマルクが選ばれた。それは，オランダへの輸入の便宜とともに，後述するようにオランダ側の豊富な労働力を利用する意図があった。同社は，最初2万錘，資本金45.5万マルクから出発して，その後，増資と増設を続け，1914年には，自動ミュール63,764とリング機28,676,撚糸6,862錘に成長し，上質のアメリカ綿とインド綿を用いて，50番手までの綿糸を生産し，殆どをオランダへ販売したほか，一部の綿糸をハノーヴァーのコンティネンタル・ゴム＝グッタペルカ会社へ，撚糸を「カッセル帆布織布会社」に販売した。

(4)グローナウ綿紡績株式会社 Baumwollspinnerei Gronau,AG.

この成功に刺激されて，1890年にヤニンク Arnold Jannink とヨルダーン Willem Jordaan が資本金80万マルクで設立したのがこの会社であり，翌年115万マルクに増資されているが，第2工場の増設は1896年のことで，1897年にはリングの第3工場（5.7万錘）が建設され，後1910年に同工場は電化され，リングは97,152錘へ増加した。同社は，ほぼ50番手までの経糸と緯糸を生産し，その販路はオランダと国内に限られていた。

(5)ヴェストファーレン綿紡績会社 Westfälische Baumwollspinnerei

この会社は，もともとは1844年に進出してきた，かの「エンスヘーデ綿紡績会社」分工場の後身で，1864年に本社が解散した際に，ヨルダン社 Jordaan & Co.（ウィルレム・ヨルダーンのほか，ノルトホルンのストロインクとドゥル P. H. Dull が参加）に譲渡されたが，同社も1870年に解散して，ブレンマー社 Bremmer & Co.となって，ストロインクが共同経営者となった。1879年ブレンマーが退社し，ヨルダーン Willem Jordaan とストロインク Jan Stroink による新会社となって，1883年新工場をディンケル川の近くに新設した。1894年には株式会社に改組された。同社は3万錘のリングによって32番手までの緯糸を生産し、また撚糸9千錘を備えていた。

(6)ドイツ綿紡績株式会社 Baumwollspinnerei Deutschland, AG.（アイラーマルク）

最後に，設立されたのがこの株式会社である。前述のウィルレム・ヨルダーンが，1890年にストロインク社の専務取締役を辞任して，グローナウ社の経営を引き受けていたが，96年に自らこの会社の設立を主導し，1914年のその死まで社長の地位にあった。同社の株主は，オランダ以外に金額で52%までも，グラートバッハ，バルメンなどライン地方や同じミュンスターラントのドイツ人によって占められた[13]。

その後，グローナウは，ヴェストファーレン最大の綿工業都市に成長し，技術的にもこの地域の綿工業をリードするが，なおも，近隣の農村のみでは工場労働者を調達できず，国境の向こう側のオランダでは，綿業の発展はテンポが落ちていたから，その過剰人口に依存することができた。すでに1894年には250人のオランダ人労働者がグローナウに越境通勤していた。1913年には，グローナウ＝アイラーマルク Eilermark の諸工場では，その労働力の80%がオランダ人であった。しかも，65%(5,700人中3,700人）は，オランダ側のフラーネルブリュッフ Granerbrug やオーヴァーディンケル Overdinkel，ロッサー Losser からの，列車や自転車による越境通勤労働者であり，ここには，こうした労働者の大群が流入して多数の労働者住宅が建設され，大集落が突如出現した[14]。これは，プロイセン当局が国籍を取得しないオランダ人が大量に定住するのを好まず，同様にオランダ人も，兵役を嫌って越境通勤を望んだし，何よ

13) Döhrmann(1924), 25-54；Kuhn(1975), 36-50；40;Muthesius(1954), 87-96. ドイツ紡績株式会社の創立当時の株主名簿は，Kuhn(1975),241.

14) Döhrmann(1924), 6, Döhrmann(1925/26), 68; Freitag(1982), 139.

りもオランダ側の住宅費や食糧費がドイツに比べて割安であったことが挙げられる[15]。(第8表) こうして，グローナウ側では，住宅などの企業内福利費や社会保障費を負担せずに，熟練工も含めて豊富な労働力を活用し，またこの地域のドイツ人労働者の賃金を全体として押し下げることができた。

2.2.その他の中心地

最後に，ノルトホルン，ライネ、ボーホルトなどいくつかの主要な中心地について，その後の発展を概略しておきたい。(第9表)

まず，グローナウについで綿紡績業の発展が目覚ましく，しかも織布部門では6,000台の力織機を擁したライネでは，この地に初めて綿紡績業を設立した，キュンパース＝ティンメルマンの子供たちが，1879年以降分社した4企業（すべて織布兼営）に加えて，そのイギリス人技術者のジャックスンの子弟が設立した2社，キュンパース＝ティンメルマン社が出資して発足（1890年）したヴェルナー織布会社 Werner & Co. Weberei でその生産の殆どすべてが占められていた。なおライネでは，グローナウとは異なり，オランダ側からの通勤は不可能であったが，それでもその労働力として多くのオランダ人労働者に依存していた[16]。

それにたいして，紡績，織布ともに多数の企業が参入して，中小規模の多数の紡績や織布企業が多様な製品に特化していたのがボーホルトである。ここでは，織布専業企業のみで35社を数え，紡績7社も，せいぜい1～4万錘規模に止まった。なお，このボーホルトでは1870年に設立されたシューリング＝ヘルデイング社

第8表　エンスヘーデ／グローナウ間食料品価格，賃金比較

グルデン（1.66マルク）

A．家賃・税金・食料等

	エンスヘーデ	グローナウ
家賃（週）	1.95	2.10
直接税(1,660グルデン)	3.75	14.85
小麦粉　1/2kg	0.09	0.11
小麦パン	0.09	0.10
ライ麦パン	0.05	0.09
マーガリン	0.46	0.42
豚　肉	0.36	0.88
牛　肉	0.42	0.45
ベーコン	0.40	0.54
油　脂	0.42	0.60
バター	0.70	0.72
チーズ	0.16	0.24
砂　糖	0.20	0.15
コーヒー	0.60	0.72
茶	0.90	1.30
タバコ	0.30	0.78
牛乳　1リットル	0.08	0.09
石油	0.08	0.12
マッチ　1箱	0.075	0.15

B．週賃金

	エンスヘーデ	グローナウ
紡績工	15～16	15～16
織布工	10～12	11～13
リール工	7.50	9.00
糸巻工	8.50	9.00
雑用工	7.50	9.00

Simonetti (1921), 87.

Schüring & Herding が，1903年にドイツではじめてノースロップ式自動織機を設置して粗ネッセル織生産を開始している。ボーホルトがどれだけオランダ人労働者に依存していたかは不明であるが，1910年に「ヘルダーラント＝ヴェストファーレン蒸気市街鉄道会社」Gelders-Westfaalsche Tram-Maatschappij が設立されて，リヒテンフォールデ＝アールテン＝ボーホルト Lichtenvoorde-Aalten-Bocholt間の軽便鉄道 Kleinbahn が開通してオランダ人の通勤が便利となった[17]。

最後に，グローナウと同じくトゥウェンテの

15) これらの，ドイツとの国境に近い町では，郵便や納税以外では，グルデンに代わってマルクが通用していた。

16) *Tradition* (1960), 20-29; 1887年に分離独立した，F.A. キュンパース綿紡績＝織布会社 F.A. Kümpers Baumwollspinnerei- und Weberei では，最初の15年の間に雇用した労働者の実に41%がオランダ人であった。Suermann (1989), 57.

17) Westermann (1989), 44-48; Westerhoff (1984), 184; Schweitzer (1978), IV, 27.

第9表　西ミュンスターラント＝ベントハイム伯領の綿業の発展（1887-1914）

紡績

所在地	1887		1892		1898		1905		1909		1913	
	経営	錘数	経営	錘数	経営	錘数	経営	錘数	経営	錘数	経営	錘数
グローナウ	3	73,000	3	171,000	6	274,000	6	426,500	6	509,482	6	663,353
ライネ	4	88,000	5	123,600	7	198,375	8	321,784	9	399,740	9	543,692
ノルトホルン	1	3,000	1	14,000	1	18,000	1	24,000	3	76,072	4	193,600
ボーホルト	2	31,000	8	43,742	8	128,384	9	160,298	9	201,692	9	228,082
その他	6	84,264	6	149,790	11	186,200	14	335,222	15	469,138	16	511,453
総　計	16	279,264	23	502,132	33	804,959	38	1,267,804	42	1,596,124	44	2,140,180

織布

所在地	1892		1901		1906		1908		1913	
	経営	織機	経営	織機	経営	織機	経営	織機	経営	織機
グローナウ	1	1,030	1	1,030	1	1,035	1	1,189	1	1,176
ライネ	5	2,482	5	4,217	5	4,705	5	5,621	7	4,833
ノルトホルン	3	600	5	1,812	5	1,888	5	3,193	5	4,620
ボーホルト	25	3,746	46	6,713	43	7,788	46	9,048	45	9,701
そ の 他	29	6,658	36	12,386	42	13,843	49	17,536	51	17,634
合　計	63	14,449	93	26,141	96	29,259	106	36,584	109	37,964

Rohling (1923), Tabellen 14-15 an S.64

注）本表の数字は，ブレーメン綿花取引所の推計によるもので，第2表，第7表に比して過大であるが趨勢把握のためこのまま使用する。

メンノー派の移住によって綿業を移植されたノルトホルンでは，グローナウとは対照的に，その発展は停滞し，ストロインク＝デルデン社も1864年綿紡績から撤退した。その後は，両者は分離して独立の織布企業を営み，主としてネッセル織のような粗布の生産に集中しており，紡績も緯糸用の太糸に限られて，その他はイギリスからの輸入に頼った。このため，ビスマルク関税以降の近隣各地の新しい展開から取り残され設備も旧式化し，1881年には同じベントハイム伯領のシュットルフ Schüttorf のシュリッカー Firma Schlikker & Söhne (3.5万錘)が誕生して強力な競争相手となった。しかし，経営を交替した次世代，とりわけポーフェル Ludwig Povel が新製品，ウォーター糸のよるエプロン Waterschürze や柄物 Buntwaren などの特産品を開拓した。そして，紡績企業の新設あるいは新規参入によって，その錘数も約20万まで上昇した。ノルトホルンでも，1913年の労働者総数3,485のうち，800人がオランダ国籍で，うち300人は国境から4km(ノルトホルンからは8.5km)離れたデーネカンプ Denekamp から通勤していた[18]。

IV. おわりに

以上，概略を叙述してきたように，隣接するトゥウェンテと西ミュンスターラントは，それぞれオランダとプロイセン＝ドイツのなかでは，交通の不便な辺境ないし国境地帯として不利な環境に置かれ，どちらかといえば停滞を続けながらも，19世紀を通じて，ヨーロッパでも有力な綿業地域に成長しえた。そして，とりわけ国境に近いエンスヘーデとグローナウ，ノルトホルンは，企業家や資本，労働力の点でも，緊密な関係を取り結んで来た。しかし，第一次世界大戦の勃発とともに，こうした関係には終止符が打たれることになる。ドイツ側の綿業は，戦争による貿易や海運の途絶や外貨割り当ての削減によって原綿の輸入が困難になり，戦時下

18) Specht (1940); Wichermann (1979), 195ff. 1913年に8万錘と織機1200台を備えた最大の紡績=織布企業であるNiehues=Düttingは，1898年の設立で，ニーフースはミュンスターの大学教授の息子であり，デュッティングはオースナブリュックのワイン商人であった。なお，オルデンザールとノルトホルンの食料＝住宅費の比較（1912年）は，Lasotta (1989), 30.

では不急の民需産業として軍用を除いて綿製品の生産は禁止され，亜麻や大麻，スフなどの代用品を用いて細々と生産を続けた。こうしたなかでオランダ人労働者は通勤が不可能となったり，職を喪失し，またドイツ居住者も兵役をのがれてオランダに逃げ帰った。

1918年の休戦以降も，ドイツの綿業は，原綿や石炭，電力の不足と，かってオランダに頼った労働力の調達先を失ってその再開は容易ではなかった。とりわけ，かの大インフレで，オランダでの就業が魅力的になり，なかんづく女中や既製服産業などに5万人もの女性がオランダで職をえていた。こうしたなかでも，グローナウの諸企業は，オランダとの繋がりを利用して，その下請生産によって生産を再開できたし，アイラーマルク紡績のごとく，完全にオランダ所有の企業では増資やイギリス炭の供給を受けることができた。しかし，減価したマルクによってはもはやかってのようにオランダ人労働者を吸引できなかったので，代わりポーランドのウッジやアルザスからの引揚者やシュレージエンさらにはザクセンなどからの移住者，あるいはルール地方からの婦人労働者でそのあとを埋めることになって，各企業の労働者住宅建設もようやく本格的に進められた[19]。

参照文献

[1] Adelmann,G., "Die Zollgrenze im ostniederländisch-westfälischen Textilgebiet 1815-1850", *Textielhistorische Bijdragen,* 10(1969), 42-53.

[2] Adelmann,G., "Die deutsch-niederländische Grenze als textilindustrieller Standortsfaktor", in: G. Droege u. a., (Hg.), *Landschaft und Geschichte*(Festschrift Franz Petri zum seinem 65. Geburtstag; Bonn, 1970), 9-24; Neudruck in: ders., *Vom Gewerbe zur Industrie im kontinentalen Westeuropa* (Wiesbaden, 1986), 163-188.

[3] Ainthworth,William," Notice on the Formation of an Establishment for weaving cloth goods", repr.in Posthumus,N.W.,(red.), "Bijdragen tot de Geschiedenis der Nederlandsche Grootindustrie", (2), *Economisch-Historisch Jaarboek,* XI (1925), 175-6.

[4] Boot,J. A. P. G., *De Twentsche Katoennijverheid 1830-1873* (Proefschrift Nederlandsche Handelshogeschool te Rotterdam; Amsterdam, 1935).

[5] Boot,J. A. P. G.,/ Blonk,A., *Van Smiet- tot snelspoel. De opkomst van de Twents-Gelderse textielindustrie in het begin van de 19de eeuw* (Hengelo, 1957).

[6] Butke,Irma, *Zur Entwicklung der Textilindustrie in der Grafschaft Bentheim* (Diss. Münter; Emsdetten, 1939).

[7] Ditt,K. / Pollard,S.(Hg.), *Von der Heimgewerbe in die Fabrik. Industrialisierung und Arbeiterschaft in Leinen- und Baumwollregionen Westeuropas während des 18. und 19. Jahrhunderts* (Paderborn, 1992).

[8] Döhrmann,Karl, *Entstehung und Entwicklung der Gronauer Textilindustrie* (Diss. Rechts- und Staatswiss., Münster,1924).

[9] Döhrmann,Karl, "Entstehung und Entwicklung der Gronauer Textilindustrie", *Ahauser Kreiskalendar,* 1925/26, 330-338,502-510.

[10] Erdelen, H., *Textilindustrie in zwei Kreisen (Ahaus und Steinfurt) des Münsterlandes. Eine dezentralisierte Industrie* (Diss. Freiburg,1921).

[11] Everwijn, J.C.A., *Beschrijving van Handel en Nijverheid in Nederland,* 2 dln. ('s-Gravenhage, 1912).

[12] Fischer,E. J., "De ontwikkeling van de Twentse katoenindustrie en de toename van de arbeidsproduktiviteit tussen 1800 en 1930", *Textielhistorische Bijdragen,* 22(1981), 3-40.

19) 第一次世界大戦および戦間期については，Döhrmann(1924);Freitag(1982);Lasotta(1989);Suermann(1989)などを参照。

[13] Freitag, Christian H., "Wo viel Licht ist,gibt es auch Schatten. Über Wohnungs- und Arbeitsbedingungen Gronauer und Eper Textilarbeiter", in: Dickel,Hanspeter,(Hg.), *Natur und Kultur des Raumes Gronau und Epe* (Gronau, 1982), 138-147.

[14] Henderson, W. O., *Britain and Industrial Europe* (Leiceter, 1965).

[15] Jacobs, G., *Die deutschen Textilzölle im 19. Jahrhundert* (Diss. Erlangen; Braunschweig, 1907).

[16] Kerstesz, A., *Die Textilindustrie sämtlicher Staaten. Entwicklung, Erzeugung und Absatzverhältnisse* (Braunschweig,1913).

[17] Kersting, A.,"Textilindustriegebiet des westfälisch-niederländischen Grenzbezirks", *Westfälische Forschungen,* XI(1958),86-105.

[18] Koninkrijk der Nederlanden, Departement van Financiën, *Statistiek van In-, Uit- en Doorvoer over het jaar 1913* ('s-Gravenhage, 1914).

[19] Kötter,H., *Die Textilindustrie des deutsch-niederländischen Grenzgebietes in ihrer wirtschaftsgeographischen Verflechtung* (Diss. Bonn, 1951).

[20] Kuhn, Wolfgang, *Technische Denkmale der Textilindustrie Gronaus unter besonderer Berücksichtigung ihrer sozio-ökonomischen Umgebung (1854-1924).* Diss. Geschichte; Bochum, 1975.

[21] Lassotta,Arnold/Lutum-Lenger,Paula,(Hg.), *Textilarbeiter und Textilindustrie. Beiträge zu ihrer Geschichte in Westfalen während der Industrialisierung* (Westfälisches Industriemuseum, Schriften Bd.7; Hagen,1989).

[22] Lassotta, Arnold, "Auf dem Wege ins Industriezeitalter: Zur Wirtschaftsgeschichte des deutsch-niederländischen Grenzraums", in: Lassotta/Lutum-Lenger(1989), 10-38.

[23] Mansvelt, W. M. F., *Geschiedenis van de Nederlandsche Handel-Maatschappij,* 2 dln.(Haarlem, 1924).

[24] Murfield,C., *Festschrift zur Hundert-Jahrfeier der Firma Kümpers & Timmerman. Baumwoll-Spinnerei und weberei i. Rheine 1835-1935* (Rheine,1935).

[25] Muthesius,V., *100 Jahre M. van Delden & Co. 1854-1954. Zur Geschichte der münsterländischen Baumwollindustrie* (Gronau, 1954).

[26] Rieger,W., *Verzeichnis im deutschen Reiche der auf Baumwolle laufenden Spindeln und Webstühle* (Stuttgart, 1913).

[27] Rohling,Rudolf, *Die Standortsentwicklung der münsterländischen Baumwollindustrie* (Diss. Rechts- u. Staaatswissenschaft, Universität Freiburg i.B.,1923).

[28] Rutemöller,Josef, "Carl Kümpers und die Anfänge der Textilindustrie in Rheine", *Spindel und Schiffchen,* Jg.22(1958), Nr.7.

[29] Schüren,R., *Staat und ländliche Industrialisierung. Sozialer Wandel in zwei Dörfern einer deutsch-niederländischen Textilregion 1830-1914* (Dordmund, 1985).

[30] Schüren,R., "Heimgwerbliche Bevölkerung und Fabrikarbeiterschaft in deutschniederländischen Grenzraum (Westmünsterland/Twente) vor 1860", in: Ditt/Pollard, (1992), 430-450.

[31] Schweitzer,A. *Zur Geschichte der Textilindustrie in Euregio* (Enschede,1978).

[32] Simonetti, T., *Die Entwicklung de Baumwollindustrie des Münsterlandes im 19. Jahrhundert und in der ersten Jahren des 20. Jahrhhunderts* (Diss. Rechts- und Staatswiss., Münster, 1921).

[33] Slicher van Bath,B. H., *Een samenleving onder spanning. Geschiedenis van het platteland in Overijssel* (Assen, 1957).

[34] Specht,H., *Nordhorn. Geschichte einer Grenzstadt* (Nordhorn, 1941).

[35] Suermann,Detlef, "》Betriebliche Sozialpolitik《 im Münsterland", in Lasotta/Lutum-Lenger

(1989), 55-69.

[36] Teuteberg,H.J., *Westfälische Textilunternehmer in der Industrialisierung: Sozialer Status und betrieblches Verhalten im 19. Jahrhundert* (Dortmund,1980).

[37] *Tradition eines Familienunternehmens in fünf Generationen 1835-1960*, hg. anläßlich des 125 jährigen Bestehens der Baumwollspinnerei und weberei C. Kümpers Timmerman, Rheine (Gladbeck,1960).

[38] Van Schelven,A.L.,"De Dixons op het continent", *Textielhistorische Bijdragen,* 12 (1971), 28-34.

[39] Westerhoff, Eduard, *Die Bocholter Textilindustrie. Unternehmer und Unternehmen,* 2. überarbeitete Auflage (Bocholt, 1984).

[40] Westerhoff, Eduard, "Die Bocholter Textilindustrie",in: Lassotta/Lutum-Lenger(1989), 39-54.

[41] Wichermann, Clemens, "Vom Heimgewerbe zur Fabrik. Industrialisierung und Aufstieg der Nordhorner Textilindustrie im 19. und 20. Jahrhundert", in: Looz-Corswarem, Clemens v./Schmitt,Michael,(Hg.), *Nordhron. Beiträge zur 600jährigen Stadtgeschichte* (Nordhorn, 1979), 190-228.

[42] Wichermann, Clemens, "Die Indutrialisierung des Baumwollgewerbes in Münsterland", in: Ditt/Pollard(1992), 192-222.

[43] 石坂昭雄『オランダ型貿易国家の経済構造』(未来社, 1971年)

[44] 石坂昭雄「工業地域と国境——ドイツ・ベネルックス・フランス・スイス国境工業地域の形成過程の事例研究——」,『経済学研究』(北海道大学),第43巻第4号,1994年3月,19-34頁.

[45] 馬場 哲「北西ドイツ・ラーヴェンスベルク地方における『プロト工業化』——領邦国家と都市商人——」,『経済学論集』,第62巻第4号(1997年1月),1-35頁.

[46] 原島正衛「ネーデルラント通商会社の設立と発展——1824－1850の組織・活動とオランダ経済——」,『日蘭学会会誌』,第9巻第1号(1984年10月),9-32頁

[47] 肥前栄一「北西ドイツ農村定住史の特質——農民屋敷地に焦点をあてて——」,『経済学論集』,第57巻第4号 (1991年),2—24頁.